

論文

ヴォルフの存在論のために

Für Wolffs Ontologie

藤井良彦

FUJII, Yoshihiko

1. はじめに

安藤孝行は、遺稿『存在の忘却』において次のように述べている。「われわれの持っている哲学史教科書の大部分は、デカルトについて語る十分の一も、ヴォルフについて語ろうとしない。彼にあてがわれるのは、せいぜいのところ二、三頁にすぎない。そしてその評価は一様にライプニッツ哲学の垂流で通俗哲学者というに尽きる。読者はそれを信じて、安んじてヴォルフを無視する¹」。

安藤ほどヴォルフを評価した研究者はいない。安藤は、「現存」を「可能性の補完 (complementum, Erfüllung)」とするヴォルフの発想を「独創」と評したのである²。

ヘーゲルに始まるヴォルフの悪評は、不思議とショーペンハウアーに極まるのだが、その再評価はビヒラーの一書、『ヴォルフの存在論³』(1910年)に始まる。その書名が示す通り、ヴォルフの再評価は、その形而上学を存在論と正確に見極めることから始まったのである。言い換えれば、その悪評はそれを認識論と誤認することに端を発しているのである。

そこで、カント的に独断的形而上学と言ってしまうばそれまでであるが、その形而上学とは何であったのか?ということである。それは、存在論としての一般形而上学であった。ヴォルフにおいて、神学はもはや自然神学として特殊形而上学の一部門を成すに過ぎない。つまり、それは「存在神学」ではない。今や、第一哲学とは存在論のことなのである。しかし、その存在論とは「事物 (ens, Ding)」の存在論なのであった。それは実体論ですらないのである。

2. ヴォルフの存在論

ヴォルフを評価する研究者たちは、決まってスアレスの名を出す。しかし、そうすると、ヴォルフにおけるスアレスの影響をどう評価するのか、ということがまた別に問題となる。ここでは、ひとまずは、ヴォルフの著作においてスアレスの名が出され論じられているのは後期の著作、つまりラテン語で書かれた著作である、という事実を押さえておけば十分である⁴。

本論では、原則として、ドイツ語で書かれている初期の著作をもとにしてヴォルフの主張を検討することにする。ヴォルフはよくドイツ語で講義をした最初の哲学者、というような評価を受けている。しかし、この評価自体、パラケルススやトマジウスの前例を思えば不正確なものなの

であるが⁵、それよりも彼がドイツ語で存在論を論じたその意義を見失うようではいけない。

ヴォルフは、『ドイツ語著作詳解』(1726年)において次のように述べている。「私は次のようなことを見出したのである。つまり、我々の言語は学問にとってラテン語よりも遥かに適しているということ、そして、ラテン語ではいかにもバルバロイ風に聞こえることも生粋のドイツ語であれば論じることができるということである⁶」。

ヴォルフの主張に関しては、前期の著作と後期のラテン語の著作との間に異同を認める見方も出されているため⁷、ジルソンのように何の断りもなくそのラテン語の著作のみを論拠としてヴォルフ論を立てることに慎重でなければならない⁸。

さて、ヴォルフによれば、「現実的に現存しようがなかろうが、存在し得るあらゆるものを可能的なもの(Mögliche)と言う⁹」。これは、最初期の著作『ドイツ語論理学』(1712年)において言われていることである。

或は、「現実的に存在しようがなかろうが、存在し得るものは全て事物と言われる¹⁰」。これも同様に、初期の著作、『ドイツ語形而上学』(1720年)で言われていることである。

同じことは、ラテン語で書かれた後期の著作、『第一哲学、存在論』(1730年)においても言われている。つまり、「事物とは現存し得るあらゆるもののことである¹¹」。或は、「可能的なものは事物である¹²」。

そこで、「事物」は「何も矛盾を含まないもの¹³」とも定義される。(この定義は、スコトゥスにまで遡るものであり、スアレスを経てヴォルフにまで引き継がれたのである¹⁴)

裏返せば、「事物が存在するためには、それが矛盾を含んでいないということでは不十分である¹⁵」。そこで、「或る物が存在するのであれば、可能性の他にも、それによって可能的なものが補完されるところの、より以上のもの(was mehreres)が必要である¹⁶」。

ヴォルフにおける「事物」の特徴については、安藤による次のような指摘が参考になる。「ensがens in actuとens potentialeに分けられるのは、ensが現実的にensであったり、可能的にensであったりするという意味でのensの分類ではなく、ensはそれ自身ではensであることにかわりはなく、且つそのensを構成するものはessentiaであり、このessentiaはpossibilitasであるということである。すなわち、ens in actuに於いても、ens potentialeに於いてもensがensとしてpossibilitasであることには変りはない¹⁷」。(「現実的な事物(ens in actu)」と「能力的な事物(ens potentiale)」という区分についてはここでは問わない。重要なのは、ens = possibilitasという構図である。)

このように、ヴォルフにおいて「可能的なもの(possibilitas)」とは、「存在し得るもの」であり、それが「事物」なのである。従って、ヴォルフにおいては、こうした「事物」の可能性を規定する矛盾律は存在原理であり認識原理ではない。

安藤は続ける。「するとこの可能的なものである存在者が、現実的であるということは矛盾のようにきこえるかも知れないが、ens in actuというのは、本質として、単に可能性に止まるensが、その上に実在性を現実的に持つということであり、これに対立するens potentialeというのは、同じensが、実在性を可能的に、即ち能力として持つという意味である。いずれにしてもこれはessentiaとしてのensがexistentiaと結合しているか否かという、対他的関係による区別なのであ

る¹⁸」。

さて、問題は、まさしくこうしたensがexistentiaと結合するその仕方にある¹⁹。「事物」が「存在し得るもの」と定義されるのであれば、「現存」は事物の本質を構成する本質性 (essentialia) の一つとして既にその可能性のうちに含まれているように思われる。しかし、事物が「存在し得るもの」であるとしても、それはあくまでも「現実的に存在しようがなかろうが」という条件のもとで言われていることなのであるから、そうした意味では、事物の「本質」は「現存」と関係なく規定されていることになる。ヴォルフの真意もここにある²⁰。

ともあれ、この点にまたヴォルフ存在論の難点が存してもいるのである。

ヴォルフの主張に関しては、次のように指摘されたことがある。曰く、「ヴォルフは、存在という概念を可能的な存在という概念に置き換えることで、哲学の対象を事物によって規定されるものではなく、事物の認識によって規定されるものとした。これに応じて、スコラ派において事物と知性との一致とされていた存在と思考の関係は覆され、今や事物の存在を規定するのは思考となり、存在が思考を規定するのではなくなった²¹」。

しかし、これは逆である。むしろ次のように言われるのが正しい。「Ensとは、ヴォルフにおいては—またスコラ派においても—端的に事物、或は対象を意味した。従って、ヴォルフの定義によれば存在論とは、存在、或は非存在を考慮することなく、対象一般についての学なのである²²」。

ここからして、勢いヴォルフ存在論の源流をスコトゥスの「超越学 (scientia transcendens)」にまで遡らせる向きもあるのだが、—本論においては、むしろそれがどのように受容され、それも変容していったのか、—ということを知りたいのである。

3. バウムガルテン、マイヤー

バウムガルテンの存在論は「或る物」ではなく「存在しないもの (Nihil)」から始まる。

もっとも、ヴォルフの存在論も、矛盾律を挙げた上で、矛盾を含むものは不可能で、含まないものが可能なのである、という順で論じられるものなのであるから、「可能的なもの」ではなく、「存在しないもの」から始まっていると言えなくもない²³。しかし、バウムガルテンの存在論は、端的に「存在しないもの」から始まるのである²⁴。

さて、バウムガルテンにおいて、「現存在 (現存)」とは、事物の本質、或は変状 (属性、様態) の「総括 (complexus)」である。その限りにおいて、それは「本質、或は内的な可能性の補完²⁵」とされるのである。(なぜなら、「変状」とは、「本質の帰結²⁶」のことであるから。)

そこで、「補完」とは、この場合、「汎通的な規定 (determinatio omnimoda)」のことであるが、それ自体としても一つの实在性とされるものである。なぜなら、バウムガルテンにおいては、「実定的かつ肯定的な規定は、それが真なる規定であるならば、实在性である²⁷」、或は「現存は本質と矛盾せず、实在性であり (36節)、本質と共可能的なものである (50, 55節)²⁸」と言われるからである。

この辺の事情は、バウムガルテンの教え子であるマイヤーによってわかりやすく説明されている。

まず、「事物の現実性とは、事物において本質の外で (außer dem Wesen) 共可能的であるところのあらゆる内的な規定 [=変状] の総括である²⁹⁾」。

そこで、「現実性 [=現存] とは、本質と矛盾しないところの、つまりは本質と並んで (neben dem Wesen) 可能的であるところの一つの実在性である。というのも、現実性とは、本質の外で可能的なあらゆる内的な規定の総括である (60節) から、それは本質と矛盾するものは何も含んではない、ということである。しかし、現実性もまた一つの実在性なのか? もちろん、事象は現実性によって付加 (Zusatz) を得る、つまりは真なる増加を得る (48節) のであるから³⁰⁾。

これは、「事物であるものは全て可能的なものであり、可能的なものはまた事物でもある³¹⁾」ということの説明として言われていることである。この考え方は、一見してヴォルフと同じものである。ヴォルフによれば、「現実的に存在しようがなかろうが、存在し得るものは全て事物と言われる」ということなのであった。そうすると、「可能的なもの」としての「事物」が現実性を獲得する場合に、それは現存する、ということになる。

しかし、バウムガルテンによれば、「現存に関して規定され得る可能的なものが事物である³²⁾」ということなのである。そこで、ヴォルフにおいては「補完」とされていたが、バウムガルテンにおいては「汎通的な規定」とされる「現存在」は、勢い「現実性」という一つの述語として看做されるようになる³³⁾。しかし、マイヤー自身も「現実性もまた一つの実在性なのか?」と言っているように、「汎通的な規定」そのものを一つの実定的な規定として看做すことには、やや問題があるようである。

とはいえ、マイヤーは、先の引用文において参考箇所として挙げられている箇所 (『形而上学』第一卷、48節) において、やはり次のように述べている。つまり、「肯定的なものと思われるのみならず、実際にそうであるような肯定的な規定は、実在性、或は実在的な規定と言われる³⁴⁾。そして、「実在性とは、事象に対する真なる付加であり、それにより事象は実際に或る物を得て、増加、増大するようなものである³⁵⁾」。

従って、マイヤーにおいては、現存は「現実性」であるが、それ以上に、それはまた「実在性」なのである。バウムガルテンの主張を突き詰めれば、確かにそうなるのかもしれない。バウムガルテンにおいても、「現存」は「現実性 (actualitas)」である³⁶⁾。(先に引用した、「現存に関して規定され得る可能的なものが事物である」というバウムガルテンの文章は、マイヤーによって、「事物とは、現実性に関して規定され得る限りにおける可能的なものである」と訳されている³⁷⁾。)

しかし、やはり「現実性もまた一つの実在性なのか?」という疑問は払拭し切れないであろう。マイヤーの主張は、バウムガルテンの体系を忠実に解釈したものである³⁸⁾。その限りでは、「現実性もまた一つの実在性なのか?」という問いには肯定的に答えられる。

しかし、ヴォルフの体系を前にしては、必ずしもそれは肯定的に答えられる問いではないのである³⁹⁾。ヴォルフにおいて、事物の本質は、それが「現実的に存在しようがなかろうが」規定され得るものなのであった。従って、少なくとも *possibilitas* としての事物の本質を構成している本

質性のうちに現実性は含まれていないのである。パウムガルテンは、この点をどう考えていたのであろうか？

—こうした中、「現存在は何らかの事物のいかなる述語でもなければ規定でもない」と釘を刺したのはカントであった。

3. カントによる批判

ヴォルフは、「現実的に存在しようがなかろうが、存在し得るものは全て事物と言われる」と言っていた。実は、この定義を受け入れる限り、「現存在は何らかの事物のいかなる述語でもなければ規定でもない」というカントの有名なテーゼは、あまり意味を持たないのである。

例えば、このテーゼが次のようにして説明されるとすればどうであろうか。つまり、「現存するものは、単に可能的なものとしての当の事物との区別を明示するようなどんな特別な規定も持たない。そうでなければ、現存するものは、可能的なものとして思考されたものと全く同じものではなく、付け加わる規定によって何か別のものになってしまう⁴⁰」。

しかし、これはヴォルフの主張と矛盾しないのである。

では、あのテーゼは何に対して言われていることなのか？

カントの『証明根拠』(1762年)の第二部、第八考察には、「可能的なものであれ現実的なものであれ、現に存在するもの (was da ist) は、それが神によって与えられている限りにおいてのみ、或る物である⁴¹」という文章がある。ここからして、カントにおいては、「事物」と「現存在」との区別が付けられていない、ということが言えるだろう。

その反対に、ヴォルフにおいては、可能的なものであれ現実的なものであれ、いずれにしても「事物」であることに変わりなく、それが現に存在するかどうか、ということは別に問われるべき事柄である。従って、「可能的なものであれ現実的なものであれ、現に存在するものは云々」などと言うことはそもそもできない。ヴォルフは言っている。「現に存在しようがなかろうが、存在し得るあらゆるものを、私は可能的な〔もの〕と呼ぶ⁴²」。この主張を前にしては、「現存在は何らかの事物のいかなる述語でもなければ規定でもない」というカントのテーゼは意味を持たないのである。

確かに、『証明根拠』には「可能的な事物 (möglich Ding)」という言葉も見られるが、基本的には、それは「可能的なもの」と「現実的なもの」を対概念として進められる論である。そして、この「可能的なもの」とは、「事物」ではなく「概念」である。カントは、これを「単に可能的な概念」と言う⁴³。そして、「現実的なもの」とは、「現存する或る物 (etwas Existirendes)」であるとか「現実的な或る物」と言われるところの「現存在」のことである。つまり、カントの論は概念とその実質という区分に基づいているのである。(こうした事情からして、同書においては「主語概念そのもの」であるとか「事物そのもの」という言い方が多用されているのである。)

言ってしまうえば、この辺りの基本的な概念規定において、カントはヴォルフから離れてしまっているのである。しかし、よく考えてみれば、カントは必ずしもヴォルフを批判してはいない。

確かに、カントは、「現存在とは可能性の補完であるというヴォルフの定義⁴⁴、明らかにあまりにも無規定である。事物における可能性以上のもの (was über die Möglichkeit) ということが何が考えられ得るのか、ということについて既に前もって知っているものでなければ、この定義から学ぶことはないだろう⁴⁵」と言っている。

ともあれ、これはヴォルフの定義が不十分だ、と言っているのであって、必ずしもそれを否定しているわけではないのである。「事物における可能性以上のもの」とは、ヴォルフにおいて「可能性の補完」とされているもののことであるが、確かに「以上のもの」と言ったところで何が言われているわけではないだろう。そこで、バウムガルテンは「現存」を「実在性」の一つとして数えたのであるが、カントとしては、「現存は何らかの事物の述語ではない」以上、それを認めるわけにはいかない。では、何が「現存」なのか？とさえ、それは「事物の絶対的な定立」である、とカントは言うわけである。

要するに、カントはヴォルフの定義を踏まえながらも、バウムガルテンによるその解釈を批判しているのである。とはいえ、「絶対的な定立」と言ってみたとところで事態は改善しないのではないだろうか？

いわゆる前批判期におけるカントのヴォルフ哲学との関係については、これまで様々に言われてきた。ベックは、「カントは決して正統的なヴォルフ主義者ではなかった⁴⁶」と述べている。これに対して、別の哲學家は次のように反論している。曰く、「カントの思考においては、やはりヴォルフやその教え子たちによる影響が現実にあった。この点を考慮しなくては、「現存」を「絶対的な定立」とする定義などは完全には理解できないのである⁴⁷」。

とはいえ、上に述べたように、カントにおいてはヴォルフにおける「事物」の定義が歪んでいて、という事実を頭に入れて置かなければならない⁴⁸。言ってしまうと、だからこそカントは、ベックの言うように「正統的なヴォルフ主義者」ではないのである。

—エーベルハルトはメンデルスゾーンに宛てた書簡において次のように述べている。「カントの事物の絶対的な定立ということは何がお考えのことがあればお話し下さい。ひょっとしたら、カントの考えは正しいのではないかと、とも思いますが、だからと言って、それがバウムガルテンやヴォルフの考えよりも豊かなものであるのかはわかりません。私には、やはりカントの考えは間違っているように思います。というのも、絶対的に定立されるべき事物とは何でしょうか？それが単にその可能性における事物 [= 可能的な事物] のことであるとすれば、それはどのようにしてその絶対的な定立によって現実的となるのでしょうか？ なおも或る物が付け加わるのでしょうか？すると、付け加わるということは、ヴォルフの可能性の補完、或はバウムガルテンの事物のあらゆる変状に関する規定のことではないですか？ また、事物とは現実的な事物のことであるとすれば、定義は意味を成しません。事物が現実的に絶対的に定立されている場合に事物は現実的である、ということでしょうから⁴⁹」。

J. A. エーベルハルト (1739-1809年) は、S. J. バウムガルテンに教わり、1778年には、A. G. バウムガルテンの教え子であったマイヤーからハレ大学の教授職を継いでいる。この席は、もともとヴォルフが占めていたものであり、それがバウムガルテン、マイヤーと引き継がれていった

のであるから、エーベルハルトはヴォルフ派の正統な嫡子と言えよう。そうした意味では、上の批判は、カントの立場に対する正統ヴォルフ派からの反論ということになる。(エーベルハルトが正統なヴォルフ主義者であることは、引用箇所が使われている「付け加わる (hinzukommen)」という言葉からしてもわかる。これは、マイヤーによって好んで使われていた言葉で、手紙の文章とはいえ正確な表現なのである⁵⁰。)

さて、エーベルハルトは、絶対的に定立される「事物」を問題としている。『証明根拠』では、これが「或る物」であるとか、「事物そのもの」と言われていた。しかし、ヴォルフの存在論においては、可能的なものであれ現実的なものであれ、存在し得るものは「事物」である。従って、それがさらに絶対的に定立されるとしたら、「なおも或る物が付け加わるのでしょうか？」と不思議に思うのも当然であるし、そうであれば、結局のところ、カントの言っていることはヴォルフの言っていることと何ら変わらないのではないかと、思うのも当然なのである。

4. クルージュスによる批判

さて、「現存」が「事物」に「付け加わる」ものであり、その本質を構成する本質性の一つではない以上、それは「事物」が存在する「根拠」ではなく、むしろ「事物」が存在させる「原因」に関するものということになる。

そこで、例えばヴォルフは次のように言っている。「その作用 (Thun) によって、可能的なものを現実的なものにさせるような事物を、つまりは或る物をもたらしうような事物を現実化する原因⁵¹と言う。例えば、陽光が蠟を溶かすのであれば、そうしたことは継続的な加熱によって生じるのである。この場合、陽光による加熱はその作用であり、溶かすことは働きである。そして、この働きこそが、現実化する原因なのである。これによって、陽光は蠟を溶かすということ成し遂げるのである⁵¹」。

しかし、この説明ではあまりにも曖昧である。それは、「可能的なものを現実的なものにさせる」ということが、「陽光が蠟を溶かす」という物体の性状の変化を例として説明されているからである。とはいえ、それ以上に、そもそもヴォルフにおいては「原因」は「根拠」の下位概念であった⁵²、という事情が考慮されなければならない。ヴォルフにとって、「原因」は「根拠」とはなり得ないのである⁵³。

その理由は、ヴォルフが事物の可能性の定義に「原因」を含めることを嫌ったからである⁵⁴。

ヴォルフは事物の可能性を矛盾律によってのみ規定するのである。そこで、『ドイツ語形而上学』の第二章「我々の認識と事物一般の第一の諸根拠について」の論述は、矛盾律から始まっているのである⁵⁵。そこでは、「或る物が同時に存在し且つまた存在しないということは不可能である」という「命題」が「根拠」と言われている⁵⁶。ヴォルフにとって、矛盾律こそが事物の可能性の「根拠」なのである。

これに対して、事物の現実性の「根拠」を求めたのがクルージュスである。

クルージュスにおいては、「实在根拠」と「観念根拠 (認識根拠)」という二つの根拠が認めら

れている⁵⁷。後者は、いわゆる根拠のことであるが、前者は、「存在原理 (principium essendi)」であるとか、「生成原理 (principium fiendi)」と言われるものである。そして、こうした「实在根拠」は、さらに「作用的に現実化する原因 (thätig wirkende Ursache)」と「現存根拠」に分けられる⁵⁸。

クルージウスによれば、「作用的に現実化する原因」とは、「端的に現実化する原因とも言われているものであり、例えば、火や精神のように、作用力と共に働くようなものことである⁵⁹」。(ヴォルフが挙げている「陽光が蠟を溶かす」という例は、これに相当するだろう。)

それに対して、「現存根拠」とは、「その単なる現存在によって——結果へと導く作用力はなくとも——、他のものを可能的か不可能、或は必然的なものとする。例えば、封印は押された印の根拠である。或は、ペンが字面の根拠である⁶⁰」。(これは「作用的に現実化する原因」の派生的なものと言えよう。)

このように、クルージウスにおいて、「实在根拠」とは、「根拠」というよりもむしろ「原因」なのである。ここからして、クルージウスにとっては矛盾律が虚しいものとなるのである⁶¹。

そこで、クルージウスにとって、哲学の目的とは、こうした「实在根拠」を解明することである。クルージウスは言う。「哲学は、現存によって知覚される、或は証明され得るものに留まっているだけではなく、可能な限り实在根拠を、つまりは現実化する原因、或は規定する原因、意図といったものを見通すべく努めなければならない⁶²」。

こうしたクルージウスの立場が「反ヴォルフ派」と位置づけられる理由は、例えばマイヤーによる次のような主張を鑑みれば明らかであろう。マイヤーによれば、「あらゆる哲学的な探求は、事物の本質を発見することに向けられる。諸事象の本質が見出されるや、直ちに知解が開け、その他のあらゆることもまた解明される⁶³」。

この理由は、マイヤー自身が冗語的に次のように述べていることからして説明されよう。「可能的なものは全て本質を持つ。というのも、可能的なものは内的に可能的なのであるから、それは内的な可能性を持つ (29節)。さて、内的な可能性とは本質のことである (51節)。従って、可能的なものは全て本質を持つのである⁶⁴」。(マイヤーによれば、「事物であるものは全て可能的なものでもあり、可能的なものはまた事物でもある」のであった。)

従って、「本質とは、いわば事物全体についての設計図であり、見取り図、略図であって、現実性とは、こうした見取り図の仕上げである⁶⁵」。

こうした主張は、やはりヴォルフの主張を踏襲したものである。ヴォルフは言っている。「哲学とは、あらゆる可能的な事物に関する、いかにして、そしてなぜそれらは可能的であるのか、ということの学問である⁶⁶」。そこで、「哲学者は、或る物が可能的である、ということを知るだけではなく、なぜそれは存在し得るのか、ということの根拠を示すことができるのでなければならない⁶⁷」。

繰り返すが、ヴォルフにおいて「根拠」とは、「或る物が可能的である」ということ、つまりは「なぜそれは存在し得るのか」ということの根拠なのである。従って、ヴォルフにおける根拠とは、少なくとも「認識根拠」ではない。それは、「事物」の存在原理なのである。そうした意味では、これはクルージウスの言うところの「实在根拠」に近いものである。(この点において、

「クルージウスは自らが否定するものによってつよく規定されているとってよい⁶⁸」という指摘は当を得ている。）

ただ、あくまでもヴォルフの根拠は「事物」の可能性の根拠であるが故に、それが存在するかしないかは不問に付した上での存在原理なのであるから、「認識根拠」ではなくとも、狭い意味においての、つまりは「現実化する原因」としての「实在根拠」というわけでもないのである。

そこで、クルージウスにとっては、やはりヴォルフの——それもとくにバウムガルテンに代表されるヴォルフ派の立場は、彼自身の言葉で言えば、「観念根拠」のみを論じた不十分なものであった。彼らにおいて、事物の現実性は、それが一つの実在性である限り、事物の本質との関連において考察されるものである。しかし、クルージウスにとっては、事物の現実性は「現実化する原因」によって得られるものである限り、その根拠が事物の外に求められるものなのである。そこで、クルージウスにおいては、現存は事物の可能性の「補完」でもなければ、それに付け加わる「或る物」でもない。それどころか、それは存在論的にも認識論的にも事物の可能性に先立ってなければならぬものなのである⁶⁹。

クルージウスは、「唯一人、その哲学がヴォルフとの絶えざる争論から生まれたドイツ人の思想家⁷⁰」と言われる。そんな彼の立場は、ヴォルフ派にとっての強力な反対勢力であったのである。

しかし、事情はカントの場合と同じであって、はたしてこれでヴォルフを批判したことになるのか？ということである。「根拠」はともかくとして、ヴォルフにおいても「原因」は事物の外にあるのである。また、事物の可能性に先立つ、などと言ってみたところで、ヴォルフにおいてはそもそも「事物＝可能的なもの」なのであるから、その批判は空を切るであろう。

5. レッシングによる批判

レッシングの草稿、「神の外の現実的な諸事物について」(1762年)は短い哲学論文である。

これは、書き出しからして、レッシングに特有のイロニーに満ちている。レッシングは言っている。「神の外の事物の現実性について説明しよう。なぜなら、私としては、それについてはいかなる理解をも持ち得ないと言わざるを得ないからである⁷¹」。

ともあれ、まずはヴォルフとバウムガルテンによる現存在の定義がそれぞれ批判される。

まずは、ヴォルフの定義である。「人は、事物の現実性とは可能性の補完である、と云う。では、私は問うのだが、この可能性の補完とは、事物のうちにおける概念なのか、それとも違うものなのか？ 誰が違うものであるなどと主張しようか？ しかし、この概念が神のうちにあるのであれば、事象そのものもまた神のうちであり、あらゆる事物は神自身のうちにおいて現実的であることになる⁷²」。

次に、バウムガルテンの定義である。「或は、事物の現実性とは、それに帰され得るところのあらゆる可能的な規定の総括である、と云われる。〔しかし、〕この総括もまた神の観念なのではないか？ 神の外の現実的なものは、もしも神のうちに〔その〕原像が見出されないとすれば、どのような規定を持つのだろうか？ そこで、この原像が事物そのものである、ということである

から、事物がこの原像の外においても現存する、ということは、この原像が不必要、或は不合理な仕方でも二重化 (verdoppeln) されている、ということなのである⁷³」。

こうした主張は、レッシングに特有の「像論」とでも言うべき立場からしてなされているものである。レッシングは、これを次のようにして説明している。例えば、「神の外の現実性を事物において肯定することは、単純に、この事物は神から区別されるということ、つまりは、その現実性は神の必然的な現実性とは違った仕方でも説明されなければならない、ということしか意味していない、と哲学者は言うかもしれない⁷⁴」。

しかし、「そうであれば、なぜ、神が現実的な諸事物について持っている諸概念は、そうした諸事物そのものである、と言わないのか？ 諸事物は、神とは十分に区別されるもの、それらは神のうちで現実的であるのだから、やはり必然的なものに他ならないのである。というのも、諸事物が神の外で持っていると言われる偶然性には、やはり神の観念における像〔＝原像〕が対応しているのではないか？ そして、この像こそが諸事物の偶然性に他ならないのである。神の外で偶然的であるものは神のうちにおいても偶然的であろう、つまりは、神は自身の外の偶然性についてはいかなる概念をも持ち合わせてはいないであろう⁷⁵」。

こうした前提があるために、レッシングの言っていることは、必ずしもヴォルフなりバウムガルテンに対する批判として評価できるものではない。

もっとも、これはこれでやはりヴォルフの存在論を認識論の立場から批判したものと言えようである。レッシングは、事物を概念している神の視点から、事物の存在論を批判しているのである。ともあれ、「像論」とは、そもそも事物と概念を区別することを拒むものである。事物は、それを概念している神のうちに「像」としてある、ということなのである。そこで、勢いそれは汎神論となる。

しかし、そうなると哲学史的に興味深い事実が浮かび上がってくる。

汎神論論争において、レッシングはヤコービによって「スピノザ主義」者とされる。それに対して、レッシングの「スピノザ主義」を「純化されたスピノザ主義」、或は「純化された汎神論」として、レッシングは或る種の「スピノザ主義」者であったかもしれないが、無神論者ではなかった、と巧妙に反論したのはメンデルスゾーンであったが――、実はこの「純化された汎神論」なるものが、上に見たようなレッシングの「像論」を敷衍したものに他ならないのである。つまり、レッシングの汎神論とは、その成立の一契機としてヴォルフ派の存在論批判を含むものなのである、

そうすると、思い起こされるのが、ヴォルフによる事物の定義が、まさにあのスピノザを批判して成り立つものでもあった⁷⁶、という事実である。「スピノザ主義」という嫌疑を斥けることがヴォルフにとっては重要なことであった⁷⁷。けだし、「スピノザ主義」者とされたレッシングの汎神論がその存在論を批判するものであったとしてもおかしくはない。それどころか、ヤコービにしてみれば、ヴォルフの哲学はそもそも「スピノザ主義」を帰結するものなのである。しかし、友人のレッシングに着せられた「スピノザ主義」者という汚名を雪ごうとしたメンデルスゾーンにとって、ヴォルフはまたスピノザを公正に評価した最初の哲学者でもあったのである。――そ

ここで、ヤコービの言うように、スピノザの「亡霊」がドイツを彷徨している、ということなのであるが、これがなんと当のヤコービがメンデルスゾーンに宛てた書簡において述べていることなのであるから事態は複雑である⁷⁸。

とまれ、文学者として、レッシングはゴットシェートの演劇論を批判している。しかし、ゴットシェートはまたヴォルフ派の哲学者でもあった。哲学者としてのレッシングは、そのヴォルフ派の哲学をも批判しているのである。

6. 結び

ヴォルフの存在論は「事物」の存在論であった。そして、それはスアレス以来の後期スコラ学を独自に発展させたものであった。しかし、ヴォルフ以後の展開を見ると、その存在論は悉く認識論的に解釈された上で、継承、乃至は批判されていったのであった。安藤が次のように結論するのであれば、それは正しい。曰く、「バウムガルテンの形而上学はヴォルフの論理主義的傾向をさらに前進させたものであり、これは存在の学という本義をはなれて認識の根拠原則の学となった⁷⁹」。しかし、こうした傾向は、バウムガルテンばかりか、それを批判したクルージュウスやカント、はてまたレッシングにまで見られるものなのである。言うならば、ヴォルフの存在論は存在論として評価、批判されはしなかったのである。

この点に、ヴォルフがなかなか正当に評価されて来なかった理由があるように思われるのである。

註

- 1 安藤孝行『存在の忘却』白雲山房、1986年、34頁。
- 2 同上、41頁。
- 3 H. Pichler, *Über Christian Wolffs Ontologie*, Leipzig, 1910.
- 4 1723年、ハレ大学を追われたヴォルフは、マールブルク大学に歓喜をもって受け入れられるが、そこでヴォルフは後期中世哲学に親しみ、その成果はラテン語の著作において発表された。ちなみに、『ドイツ語形而上学注解 (=別巻)』も1724年に出されたものであるから、ドイツ語の著作とはいえ後期の著作である。
- 5 cf. H. Möller, *Vernunft und Kritik*, Frankfurt am Main, 1986, pp. 22-23.
- 6 C. Wolff, *Ausführliche Nachricht von seine eigenen Schriften, die er in deutscher Sprache von den verschiedenen Theilen der Welt=Weißheit heraus gegeben*, Franckfurt am Mayn, vermehrte Auf., 1733, § 16.
- 7 H. Lüthje, *Christian Wolffs Philosophiebegriff*. in: Kant-Studien, Bd. 30, 1925.
- 8 cf. E. Gilson, *L'être et l'essence*, 2e éd., Paris, 1962, pp. 166.
- 9 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von den Kräfften des menschlichen Verstandes*, vermehrte Auf., Halle, 1754, Vorbericht, § 3.
- 10 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen*

überhaupt, neue Auf., Halle, 1752, § 16.

- 11 Wolff, *Philosophia Prima sive Ontologia*, § 134.
- 12 *ibid.*, § 135, スアレスとの関係について言えば、この書名、つまり「第一哲学」と「存在論」がsiveと素朴に並べられている点からして、既にヴォルフの立場はスアレスのそれとは異なっているように思われる。ジルソンの言うように、「神学なしの存在論を打ち立てた最初の人物は、まさしくヴォルフその人である」。Gilson, *L'être et l'essence*, p. 172.
なお、この点に関するスアレスの立場については以下を参照。田口啓子『スアレス形而上学の研究』南窓社、1977年、42頁以下。
- 13 Wolff, *Vernünfftigen Gedanken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, anderer Theil*, 3te Auf., Halle, 1733, § 6.
- 14 cf. L. Honnefelder, *Scientia transcendes*, Hamburg, 1990, pp. xiv f.
- 15 Wolff, *Vernünfftigen Gedanken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, § 14.
- 16 *ibid.*
- 17 安藤『存在の忘却』、44頁。
- 18 同上。
- 19 この点からしてスアレスとの異同を論じたものとして以下を挙げておく。M. Sgarbi, *Francisco Suárez and Christian Wolff*. in: *Francisco Suárez and his Legacy*, Sgarbi (ed.), Milano, 2010.
- 20 cf. *Philosophia Prima sive Ontologia*, § 134 Anm.
- 21 R. Ciafardone, *Von der Kritik an Wolff zum vorkritischen Kant, Wolff-Kritik bei Rüdiger und Crusius*, p. 289. in: *Christian Wolff 1679-1754*, W. Schneiders (hg.), Hamburg, 2te Auf., 1986, pp. 266-277.
- 22 Pichler, *Über Christian Wolffs Ontologie*, p. 3.
- 23 この点からして、ヴォルフの立場とライプニッツのそれとの異同が論じられたこともある。cf. W. Hübener, *Zum Geist der Prämoderne*, Würzburg, 1985, pp. 84 f.
- 24 ヴォルフの『ドイツ語形而上学』において、大文字のNichtsが出てくるのは第二章の28節である。同章は10節から始まるが、例えば「可能的なもの」の定義は12節、「事物」の定義は16節にある。
- 25 A. Baumgarten, *Metaphysica*, 4te Auf., Halle, 1757, § 55.
- 26 *ibid.*, § 41.
- 27 *ibid.*, § 36.
- 28 *ibid.*, § 66.
- 29 G. F. Meier, *Metaphysik*, 1ter Theil, 1755, § 60.
- 30 *ibid.*, § 65.
- 31 *ibid.*
- 32 Baumgarten, *Metaphysica*, § 61.
- 33 バウムガルテンの存在論については次のように指摘されている。「注意すべきことに、この存在論は、ただ存在の述語のみを論じているのである」。M. Wunt, *Die deutsche Schulphilosophie im Zeitalter der Aufklärung*, Hildesheim, p. 221.
- 34 Meier, *Metaphysik*, § 48. 傍点は原文強調。
- 35 *ibid.* 傍点は引用者による。文中、「実際に (in der That)」とは、当時の用語法からして「現実的 (wirklich)」とほぼ同じ意味である。ここからして、現実性=実在性というアナロジーが生じるのである。
- 36 Baumgarten, *Metaphysica*, § 55.
- 37 Alexander Gottlieb Baumgartens *Metaphysik*, Halle, 1766, p. 18. 傍点は引用者による。この翻訳は、マイヤーがバウムガルテンの『形而上学』の第三版を訳したものである。

- 38 「マイヤーなしにバウムガルテンはいたのか？ 翻っては、バウムガルテンなくしてマイヤーはいたのか？」 C. Schwaiger, *Alexander Gottlieb Baumgarten – Ein intellektuelles Porträt*, Stuttgart-Bad Cannstatt, 2011, p. 20.
- 39 バウムガルテンの主張をヴォルフのうちに読み込むのであれば、以下の論文においてなされているように、そのラテン語の著作を引き合いに出すことになる。cf. G. B. Sala, *Die transzendente Logik Kants und die Ontologie der deutschen Schulphilosophie*, p. 26 (Anm. 12). in: *Philosophisches Jahrbuch*, Jahrg. 95, 1988, pp. 18-53.
- 40 Sala, *Kant und die Frage nach Gott*, Berlin, New York, 1990, p. 107.
- 41 Kant, *Werke*, Bd. 2, Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Berlin, 1912, p. 151. 傍点は引用者による。
- 42 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von den Kräfften des menschlichen Verstandes*, Vorbericht, § 3.
- 43 ヴォルフはよく *bloß möglich* という言葉を用いているが、これはもちろん「可能的なもの」を表す形容である。また、意味はやや異なるが、参考までに言えば、バウムガルテンの『形而上学』の54節における *mere possibile* という言葉は、マイヤーによって *eine bloß mögliche Sache* と訳されている。cf. *Alexander Gottlieb Baumgartens Metaphysik*, p. 16.
- 44 これは、『第一哲学、存在論』の174節をカントが訳出したものである。同書は、哲学書としてはカントが所持していた唯一のヴォルフの本である。cf. A. Warda, *Immanuel Kants Bücher*, Berlin, 1922, p. 56.
- 45 Kant, *Werke*, Bd. 2, p. 76.
- 46 L. W. Beck, *Early German Philosophy*, Harvard UP, 1969, p. 439.
- 47 W. Röd, *Geschichte der Philosophie*, Bd. 8, München, 1984, p. 68.
- 48 カントは様々な箇所でもヴォルフを批判しているが、実はそのどれもが不十分な知識に基づいたものなのである。この点については以下を参照。J. École, *De la connaissance qu'avait Kant de la métaphysique wolffienne*. in: *Archiv für Geschichte der Philosophie*, Bd. 73, Heft 3, 1991.
- 49 Von J. A. Eberhard an Mendelssohn, Nov. 15, 1778. この書簡へのメンデルスゾーンの返信は残されていないが、二人の間に親交があったことは事実である。エーベルハルトはベルリンにメンデルスゾーンのもとを訪れている。cf. Nicolai, *Über meine gelehrte Bildung*, 1799, Berlin, Stettin, p. 43.
- 50 ヴォルフ自身はこの言葉を使っていないようだが、*accedere* というラテン語の表現がそれに該当するであろう。（『第一哲学、存在論』174節の注を参照。）
- 51 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, § 120. 傍点は原文強調。
- 52 cf. Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, anderer Theil*, § 13.
- 53 簡単に言えば、ヴォルフにとって「原因」とは他の「事物」のことである。つまり、或る事物の「根拠」を含むところの他の事物が「原因」と言われるのである。cf. Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, § 29.
- 54 cf. École, *La métaphysique de Christian Wolff*, Georg Olms Verlag, 1990, p. 159.
- 55 この点、カントの「新解明」(1755年)の論述は同一律から始まる。そして、それは「認識原理」なのである。事情は以下に詳しい。中澤武「論理と實在」(『哲学世界』16号、1993年)。
- 56 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, § 10.
- 57 C. A. Crusius, *Weg zur Gewißheit und Zuverlässigkeit der menschlichen Erkenntniß*, Leipzig, 1747, § 140.
- 58 *ibid.*, § 141.

- 59 *ibid.* 傍点は引用者による。
- 60 *ibid.*
- 61 Crusius, *Entwurf der nothwendigen Vernunft=Wahrheiten, wiefern sie den zufälligen entgegen gesetzt werden*, § 31.
- 62 Crusius, *Weg zur Gewißheit und Zuverlässigkeit der menschlichen Erkenntniß*, § 63. 傍点は原文強調。
- 63 Meier, *Metaphysik*, § 51.
- 64 *ibid.*, § 58.
- 65 *ibid.*, § 60.
- 66 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von den Kräfften des menschlichen Verstandes*, Vorbericht, § 1. この定義については、ヴォルフ自身が『哲学一般についての予備的叙説』(1728年)の第二章、29節において詳しく述べている。これは以下の論集に「翻訳資料」として訳出されている。『文化学年報』15号、神戸大学大学院文化学研究科、1996年。
- 67 Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von den Kräfften des menschlichen Verstandes*, Vorbericht, § 5.
- 68 山本道雄「C. A. クルージウスの哲学」、3頁。(『文化学年報』9号、神戸大学大学院文化学研究科、1990年、1-43頁。)
- 69 Crusius, *Entwurf der nothwendigen Vernunft=Wahrheiten, wiefern sie den zufälligen entgegen gesetzt werden*, § 57.
- 70 Ciafardone, *Von der Kritik an Wolff zum vorkritischen Kant, Wolff-Kritik bei Rüdiger und Crusius*, p. 296.
- 71 G. E. Lessing, *Werke*, W. v. Olshausen (hg.), Bd. 20, Georg Olms Verlag, 1970, p. 133.
- 72 *ibid.*
- 73 *ibid.*
- 74 *ibid.*, pp. 133-134.
- 75 *ibid.*, p. 134. この引用箇所で行われていることからして、そもそもレッシングの立場はスピノザ主義とは言われ得ないと指摘されている。これは、いわゆる汎神論論争を評価する上で重要な点である。cf. F. Regner, *Lessings Spinozismus*, pp. 561-562. in: *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, G. Ebeling (hg.), 68 Jahrg., 1971, pp. 351-375.
- 76 cf. Wolff, *Vernünfftigen Gedancken von Gott, der Welt, und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, anderer Theil*, 3te Auf., § 6.
- 77 ランゲによるヴォルフ批判がスピノザの「必然性」概念に関わるものであれば、ヴォルフによる反論はスピノザの「可能性」概念に関わるものである。この点については以下に詳しい。平尾昌宏「啓蒙期ドイツのスピノザ主義」(『スピノザーナ』5号、2004年)。
- 78 1785年4月26日付のメンデルスゾーン宛の書簡を見よ。
- 79 安藤孝行『形而上学』勁草書房、増補版、1965年、81頁。